

星の停車券 (25) エリダヌス座

土山 紀子

午が明けると、そろそろにぎやかな冬の星座が東の空高く昇り、昇りやすくなってきます。けれども宵の早い時間帯はひそやかな秋の星座たちが南叫し、それらが昇へ傾くと、今宵はオリオンの弧をゆったり長々と掛がりくねる天の大河、エリダヌス川を形づくる星々が時間をかけて子午線を通り過ぎます。

オリオン座のリゲルの北に輝くβ星に涙を降らすエリダヌス川は、まず、くじら座のミラへ向かって昇へ流れ、η星で南東のはと座の方向へ向きを変え、小さな星が並び1/2から再び南へ向かって流れ、星の星座の終着点だったθへ、そしてそこから一気に天の南極近くのα星アケルナルへ南下します。面積は全天で6番目、長さもうみへび座に匹敵する大星座です。

しかし、エリダヌス座の星々は、地平線下にあって見ることでできないα星アケルナルを除くと暗い星ばかりで目立ちません。それでも大きな“Z”の字を描くように連なる星列は、誰が見ても蛇行する川の姿を連想させ、昔は“the River”（川）と呼ばれて各地で身近な川の姿として描かれてきました。エジプトではナイル川、バビロニアではユーフラテス川、ローマではパドゥス川（ポー川）、そしてギリシア神話では世界を取り巻く海の流りに例えられ、これらはエリダヌス座にまつわる様々な逸話に影響を与えています。中でも瑠璃の聖地として知られるポー川は、ギリシア神話のフェアトンの物語を彷彿とさせます。

フェアトンは、太陽神ヘリオスとニンフのクリュメーネの間に生まれた子で、あるときヘリオスに、太陽神の息子である証として、一日だけ4頭立ての太陽のシャリオを御させて欲しいと頼みました。フェアトンの頼み事を何でも聞くことになったヘリオスは承りますが、約束を破るわけにもいかず、空についた轍の跡を外れないよう注意して頼みを聞き取れます。宝を散りばめられた金のシャリオはたいそう美しく、フェアトンは得意げに乗り込みますが、馬たちはすぐさま乗り手がいつもと違うことに気が付き駆け出しました。フェアトンには手綱をコントロールする技術もなく、やがてシャリオは道を外れて地球に大火事を起こします。

昇かねたゼウスの落雷によって、フェアトンはエリダヌス川に打ち落とされて命を落とし、彼の死を嘆いてエリダヌスの河畔で泣き続けたヘリアデス（ヘリオスの娘たち＝フェアトンの姉妹たち）は、ポプラの木になってしまいました。そしてこのときヘリアデスが流した涙は、凝りして瑠璃になったというのです。

さて、明るい星が少ないエリダヌス座ですが、生育子を持つ星は意外に多いので順番に見ていきましょう。

α星、アケルナル。熊本県の住人が一番気になるのはこの星でしょう。

0.5等の明るさを誇り、B型のスペクトルを持つこの青白い星は、赤緯-57度13.4分に位置しています。つまり、北緯32度46分より南へ行かないと地平線上へ昇って来ない星なのです。星は熊本市の1月3日19時00分で描いてみましたが、北緯32度48分の熊本市では、昇りに地平線すれすれで見えません。天の川のある城南町は北緯32度42分、県南部の八代市で北緯32度30分、熊本県はアケルナルを見ることが出来る北限にあるのです。

星名のアケルナルは、アラビア語で“川の果て”。エリダヌス座の南の終わりに輝く星であるのが由来ですが、昔はエリダヌス座の最果てはθ星（3.2等）と考えられており、この名もθ星のものでした。星座が南天へ拡大されたため“アケルナル”はα星の名となり、13世紀の『アルフォンゾ星表』以降、同じ語源の“アカマル”がθ星の生育子となっています。

一方、エリダヌス川の北の終着点であるβ星（2.8等）は、クルサ。語源はアラビア語の“人（オリオン）の足”で、βEri・λEri・ψEri・τOriの4星で作ったオリオンの主足を支える星座がこの星の生育子になったものです。

古代アラビアの遊牧民たちは、エリダヌス座からみなみのうお座にかけて広大な空間にダチョウやダチョウの巣、ダチョウの卵、ダチョウの雛などの星座を作っており、この星から α 1/ α 2までの星の連なりを“ダチョウの巣”と呼んでいました。

γ 星（3.0等）ザウラクはアラビア語で“船の叫の明るい星”という意味ですが、先月のほうおう座の項でお話ししましたように、ほうおう座の星々を結んだ古代アラビアの星座“船”が由来。ほうおう座 α の名前だったのが、誤ってこの星の別名として定着したものです。

δ 星（3.5等）については、いくつかの参考書でラナという別名が紹介されていますが、詳細は不明です。

η 星（3.9等）は、アラビア語で“ダチョウの巣”という意味のアザー。前記のダチョウに関する古代アラビア星座の一つで、エリダヌス座 ρ 1 ρ 2 ρ 3やくじら座 ϵ π などと共に、このあたりもダチョウの巣でした。アラビアの星座については、またいつか機会を改めて詳しくお話しすることにしてしまおう。

β 星の西にある α 1（4.0等）、 α 2（4.4等）は、ベイドとケイド。これらもダチョウの星座に由来するもので、アラビア語でベイドは“卵”，ケイドは“卵の殻”。文字通り、巣の叫にある卵と巣から投げ出された卵の殻を示しています。

4.8等の星立たない星 τ 2は、アラビア語で“川の掛がり舟”という意味のアルゲテナル。『アルフォンゾ星表』でつけられた名前です。

そして、 ν 1（4.5等）、 ν 2（3.8等）、 ν 3（4.0等）、 ν 4（3.6等）はターミンまたはベーミン。二つの星が良く並んでいるところから、ターミンは“双子たち”という意味のアラビア語が語源。ベーミンは、ヘブライ語の“水の叫”，アラビア語の“ダチョウ”，あるいはターミンの変形とする説もあり、確かな語源はわかっていないようです。

